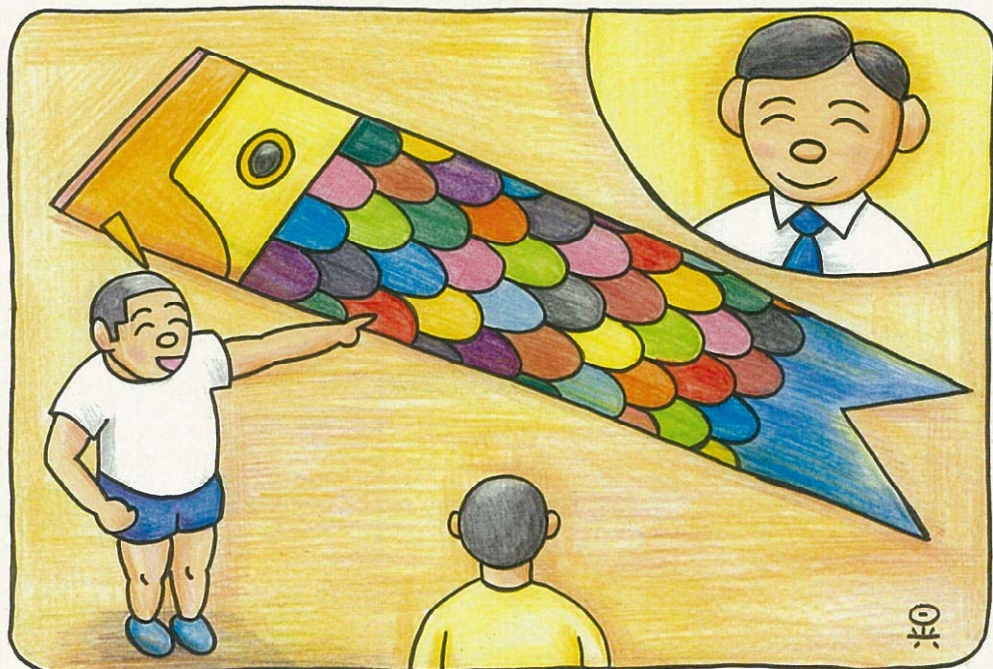




村でいちばん
たがいこいのぼり

作:花岡大学之:前田晃宏



アキオは、東京にいるお父さんから、とても大きい鯉のぼりを、送ってもらいました。それで、アキオは、友達が来ると、必ずそれを見せて、「どうだい、こんな大きい鯉のぼりを持っている者は、誰もいないだろう。五月になったら、これを青空高くあげるんだよ。」と、自慢をしました。なるほど、大きい鯉のぼりでした。広げると、座敷にいっぱいになります。



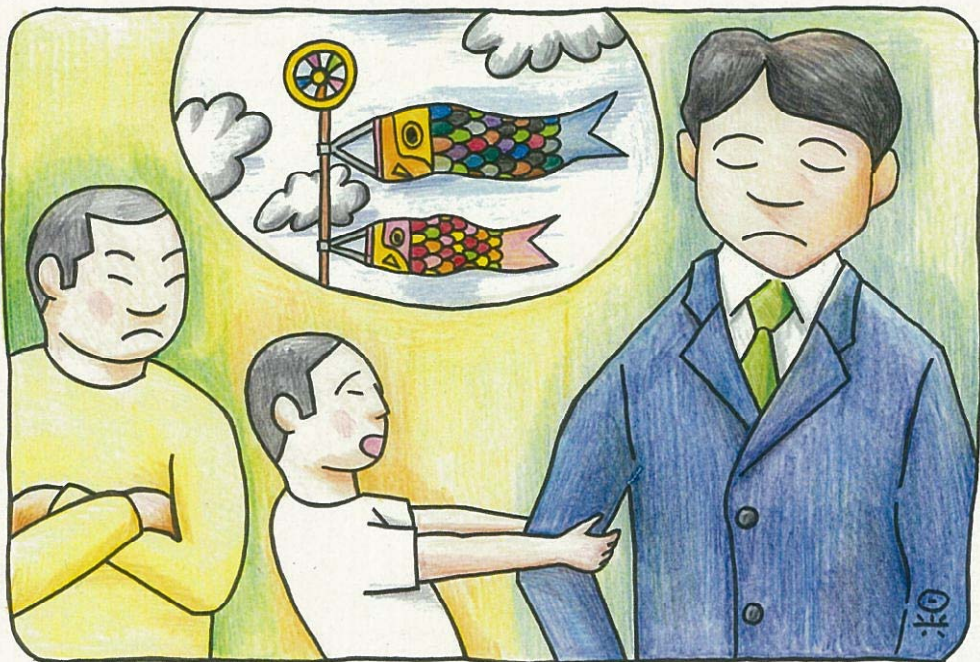
でも、アキオの、いかにも得意そうな、そういう言い方は、まるで、おまえたちの家なんかでは、どんなに奮発しても、こんなでっかい鯉のぼりは、買うことが出来ないだろうと、言っているように聞こえました。

タケシは、少ししゃくにさわって、(ふん。)と、心のなかで笑いました。

そして、(鯉のぼりぐらい、なんだい。)と、思いました。

負け惜しみではありません。

タケシは、本当に、ちっともうらやましいとは、思いませんでした。



ところが、つい先程、アキオの家から、慌てて走って帰った、一番下の弟のタダシが、いきなりお父さんの部屋にかけこんで、「ね、お父さん、ぼくにも、あんな大きな鯉のぼりを買ってよ、ね、ねえったら、お父さん。」と、おねだりしている声が、聞こえてきました。

タダシは、きっとアキオから、あの大きい鯉のぼりを見せられ、さんざん、自慢を聞かされてきたのでしょう。

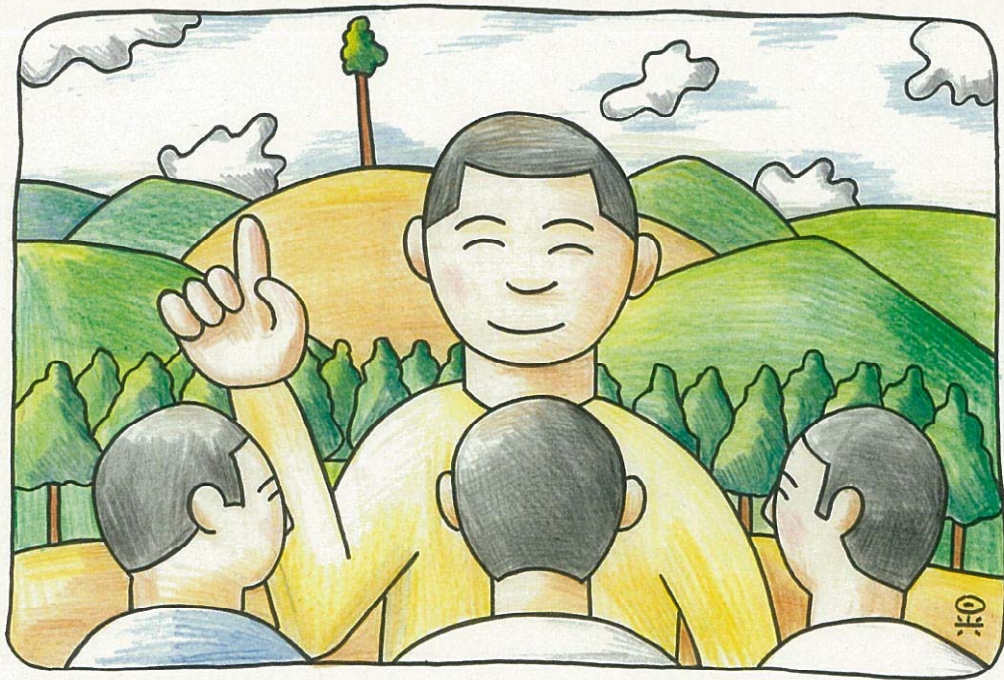
タダシは、まだ七つになったばかりです。

タケシを頭に、男の子ばかり、五人の兄弟をかかえて、学校の先生をしているお父さんが、どんなに無理な暮らしをしているか、小さいタダシには解りません。

だから、お父さんが、とてもそんなものは買えない、と言って聞かせても、「うむ、うむ、買って、買って……。」

と、ほおべたを膨らませて、駄々をこねます。

タケシは、それを聞いていて、はじめ、そんな無茶を言うタダシに、腹を立てましたが、そのうちに、タダシが羨ましがするのも、無理はないと思えてきました。



そして、まもなく、タケシの頭に、突然、とても良い考えが、ふっと、浮かんできました。

すばらしい計画です。

タケシは、にわかに、ニコニコしながら、(ようし!)と、思いました。

それで、すぐ、ツトム、サトル、タモツの三人の弟たちを、呼び集めました。

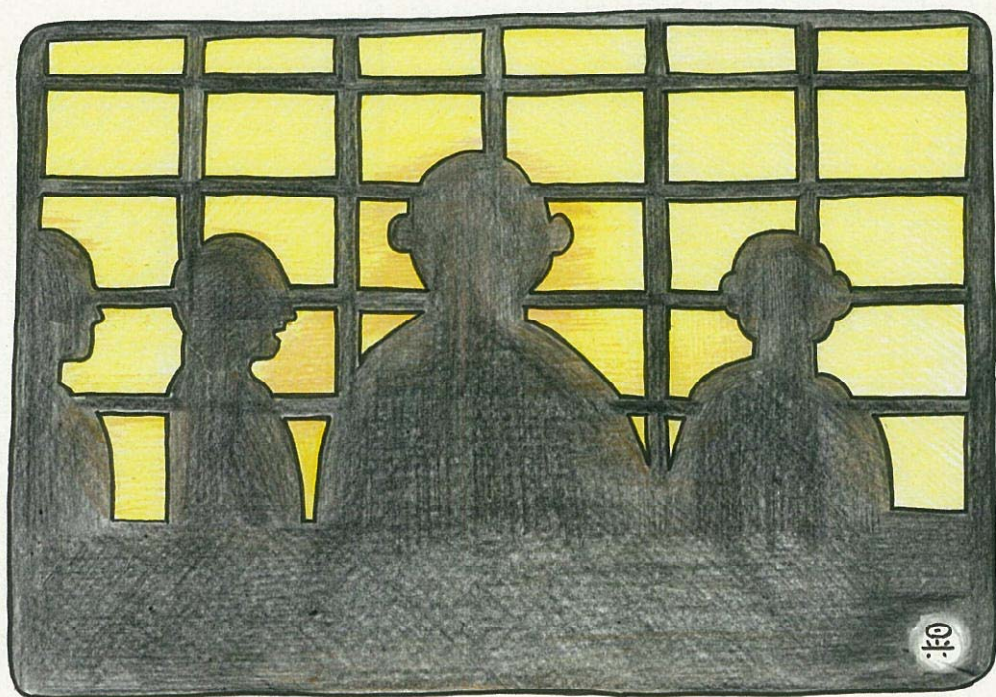
「なんなの？」

「なにをするの？」

タケシは、ヒソヒソと囁きました。

すると、ツトム、サトル、タモツの三人の弟は、急に目を輝かせて、

「よし、やろう、やろう。」と、大賛成でした。



もうすぐ五月です。

お節句が、すぐ来ます。

だから、ぐずぐずしているわけにはいきません。

それで、タケンたち四人の兄弟は、ほかの者には内緒で、

奥の座敷で、早速、仕事を始めることにしました。

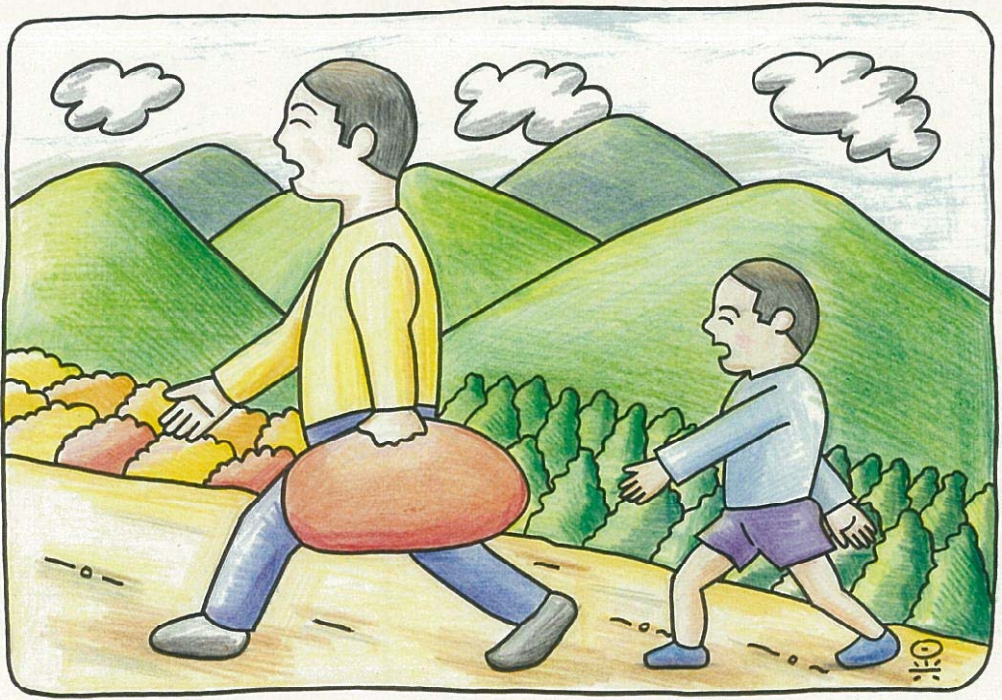
そして、みんな一生懸命に仕事をしましたので、夜遅くまでかかりましたが、

その晩に、すっかり出来あがってしまいました。

あくる日は、すばらしい日本晴れでした。

アキオは、あの大きい鯉のぼりを、もう今日から、高くあげるということです。

タケンと三人の弟たちは、まだ夜明け前の薄暗いうちに、目を覚ましました。



そしてタケシとツトムの二人は、

大きな風呂敷包みをさげて、みんなより、一足先に、裏山へ登っていきました。

あとに残った、サトルとタモツは、「タダシ、起きろ！起きろ！」

「まあ、起きろったら起きろ！兄ちゃんらが、とてもいいところへ、連れて行ってやるんだよ。」

と、サトルとタモツは、代わる代わるいい聞かせて、やっとのことで目を覚まさせました。

すると、井戸端で、からだを拭いていたお父さんが、家を出ていくみんなの姿を見つけて、

「どこへいくんだい？ ええ、朝の散歩か。そいつはいい。わしも連れて行ってくれよ。」

と、言って、一緒に裏山のほうへ登ってきました。

坂道を登り、くぬぎ林をぬけ、はげ山の頂がすっかり見えるところまで来たとき、タダシが、

「あっ！兄ちゃん、鯉のぼりが……。」と、驚いて立ち止まりました。

驚くのは、当たり前です。

はげ山のとっぺんに、一本だけ残っているマツの木に、タケシたちの作った鯉のぼりが、

さわやかな朝風を腹一杯に吸って、スイスイと泳いでいたからです。



全く、それは、思いがけない、出来事であったに違いありません。
だから、小さなタダシは、ただもう目を真ん丸くして、
「ね、兄ちゃん。あれは、どこの鯉のぼりなの？」と、聞きます。
すると、サトルとタモツは、口をそろえて、
「あれは、タダシの鯉のぼりさ。」と、得意になって答えました。
「うそだ。」と、タダシは、本当にしません。
「うそなものか。じゃ、見とれよ。」
そう言って、サトルとタモツは、笑いながら、ちょっと顔を見あわせると、大きな声で、
「おーい、タケシ兄ちゃん。ツトム兄ちゃん。」と、呼びました。
すると、鯉のぼりの立っているマツの木のでっぺんから、からだをのりだすようにして、
タケシとツトムが、手をふりながら、
「おーい、サトル、タモツ、タダシ、早く来いよ。
タダシの甘えん坊、早く走ってきて、おまえの鯉のぼりを、しっかり見ろよ。」と、
叫んでいます。



その声を聞くなり、タダシの目だまは、とんぼの目だまのように、クリクリっと明るく動いて、「おーい。」と、呼びながら、いきなり先頭を切って、坂道をかけ登りはじめました。二人の兄さんたちも、「おーい。」と、呼びながら、急いでそのあとに続きました。いや、まだもう一人、ハアハアと、肩で息をしながら、「おーい、待てよ、待てよ。」と、追いかけていく人があります。お父さんです。

鯉のぼりの下へ着いたみんなは、「村いちばんの高い鯉のぼりだ。ワアイ、ワアイ。」と、弾んだ声で、叫び合いました。